

〔1〕 教える前に

1 中国帰国者に対する日本語教育のあり方

中国帰国者の日本語学習適性は、一般にあまり高いとは言えないようである。40年もの間、中国語という日本語とはまったく体系の異なる言語を使って生活し、外国語の学習経験もほとんどない人々が、生活環境の違う日本で精神的な不安にさらされながら日本語を習得するのは大変なことである。

このような人々に対して日本語を教える際には、まず何よりも次の二点を頭に入れておかなければならない。

(1) 言葉は、行動の道具であること。

言葉を行動から切り離して教えるてはならない。行動とは、買い物をする、隣人に物を借りること、学校に欠席を届け出ることなど、我々が日常の社会生活の中で行っている活動のことであるが、言葉はそのような行動の目的を果たすために道具としてある。そこで、言葉を教えるためには、まずその言葉を使って何ができるのか、どんな行動目的が達成できるのかをしっかりと学習者に自覚させることが大切である。その意味では、教授者はむしろ言葉（日本語）を教えるという意識を捨て、様々な社会活動の仕方を教えるのだと考えた方がよいように思われる。言葉は、たまたまその活動をうまく成し遂げるのに必要な付属物なのだと考えていただきたい。

このことは、教授者側にとってばかりでなく、学習者側にも重要な心得である。中国からの帰国者の中には、日本語ができないから何もできないと考えてしまう人がいる。そうではなくて、むしろ何もしないから日本語が覚えられないのである。学習者にこのように思い込ませてしまう原因の一つは、教授者が日本語を教えることにばかり熱中してしまうことにある。教室の中で日本語を勉強させたら、それを学習者と一緒に外でも使ってみるようにしなければならない。教室で買い物をするときの日本語を勉強したら、学習者と一緒に町に出て、買い物をしてみよう。そうすることによって、学習者には日本語を使って何かができるという自信がわいてくる。教室のなかで深刻な顔で机に向かうことだけが日本語の勉強ではない。一緒に楽しく料理をするのも、洗濯をするのも日本語の勉強である。何よりも、学習者に日本語は難しいものだという恐れを持たせてはならない。

(2) 言葉は、使ってみなければ覚えられない。

言葉を教えるというと、文法の説明をしたり、単語の意味を説明したりすることだと

考える人がいる。しかし、文法や単語の意味を説明して、学習者がそれを理解したとしても、それだけでは使えるようにはならない。「こんにちは」という言葉について、それが昼間、他人に会ったときにするあいさつの言葉だと中国語で説明してやっても覚えられない。それを覚えるのは、学習者が先生とあるいは隣人と会ったときに実際に「こんにちは」と何度もあいさつをしてみて初めて覚えられるのである。これはあいさつ言葉だけに限らない。どんな表現でも単語でも、何度も使ってみなければ覚えられない。

その点で、言葉を覚えることは、自転車の乗り方を覚えることに似ている。自転車の構造や部品、なぜ倒れずに走れるのかという原理についていくら説明を受けても、自転車に乗れるようにはならない。自転車にまたがって、ペダルを踏んでみて初めて乗れるようになる。言葉もまったく同じで、何度も使ってみて、何度もよろけながら覚えていくのである。言葉を教える教授者の最も重要な仕事は、使ってみる場を提供することにある。それは教室の中でも、教室の外の実社会でもかまわない。言葉を教えたら、それをどんどん使わせていかなければならない。そうすることによってのみ、学習者は自信を持って日本語を使い、日本語を覚えていくのである。

2 行動力を身につけるための教育

中国帰国者に対する日本語教育は、1で述べたように、日本社会での行動能力をつけるための教育の一分野である。行動能力をつけるために、言葉の習得は一つの重要要素であるが、そのほかにも少なくとも次の二つの知識が不可欠である。たとえば、銀行でお金を預けたり引き出したりする行動を考えてみよう。

銀行でお金を預ける場合に、「すみません。このお金を預金したいんですが」という言葉が使えることは重要なことであるが、この言葉を覚えて使えるようになったからといって、帰国者が銀行でどんどんお金を預けることができるようになるわけではない。できるようになるためには、ただ言葉だけでなく、日本の銀行のシステムについての知識がなければならない。またその上に、そもそも中国帰国者にとっては、銀行にお金を預けるとい生活習慣になじむことが大問題である。前者を場面知識の問題、後者を日本と中国の文化、生活習慣の相違の問題と言うが、言葉を使って日本社会で行動ができるためには、まずその前提となるこの二つの問題が解決されなければならない。

『生活日本語Ⅱ』は『生活日本語』に引き続き、中国帰国者が日本社会で直面する活動場面を中心に構成された教材であり、各課にはそれぞれの場面での場面知識、日本と中国の生活習慣の違いについての解説が加えられている。また、この『指導参考資料』では各

課のそれぞれの会話について「指導の前に」という項目を設け、主に日本と中国の文化差と結び付けて指導上の留意点を述べた。ただし、そこで述べたことは、一般的なことであって、具体的にそれぞれの学習者に対応できるものとはなっていないかもしれない。学習者それぞれの出身地、生活事情、また帰国して定着する地方によっても学習の前提となる知識は異なるにちがいない。教授者は「指導の前に」の説明を参考に、それぞれの学習者とその生活環境にあった対応を工夫していただきたい。

「生活日本語Ⅱ」は、「生活日本語」が交通機関の利用や銀行などの家庭外の場面を扱ったのに対して、家庭内の受け入れ家族との交渉を取り上げた場面が多い。こうした場面では、人間関係を円滑に保つことが重要な問題になってくる。特に、肉親との間など関係が親密になればなるほど、この面でのトラブルが大問題に発展しやすい。「生活日本語Ⅱ」の指導に当たっては、ぜひともこうした点に注意を払わなければならない。

3 「指導参考資料」の構成

本書は「生活日本語Ⅱ」の各課の会話文ごとに、その指導例を解説したものである。ここで述べた指導法はあくまでも一つの例であって、それが最善の方法というわけではない。

各課のはじめには「この課の目標と重点」という項目のもとに、その課のポイントを簡潔に記述した。ここでは、1、2で述べた方針に従って、学習すべき言語項目ではなく、行動項目、つまり何ができるようになってほしいかということを中心に述べてある。また、「課の構成と各会話の関連」の項は、その課の会話文の相互関係を概括できるように図式化したものである。

各会話文は、それぞれ「指導の前に」「準備」「授業」、さらに「授業」は【導入】【展開】（以下さらに【発展】【応用】等が続くことがある）に分けて、解説した。「指導の前に」は、2で触れたように、場面の知識や日本と中国の生活習慣の違いについて留意すべき点を解説したもの。「準備」では授業の前に準備しておくべき事柄、特に教具等を列挙した。また「授業」の【導入】以下は、クラス内の教授作業に関する部分であるが、【導入】は、その会話を学習する動機付けを行う部分で、学習者になぜその会話を学習しなければならないのかを自覚させることを目的としている。適切な動機付けなしに言葉の形だけを練習してもけっして身につくものではない。特に、中国帰国者に対する日本語指導では【導入】が重要である。【展開】は、授業の中心部分で、やり取りの練習が主体となる。この「指導参考資料」では、指導法を一つに特定せず、各会話文ごとに適当と思われる方法を採用しているので、【展開】以降に【総合】【発展】【応用】などの項目が付け加わっ

ている場合がある（各会話によって項目の種類、有無は一定ではない）。この部分はいろいろな方法の可能性を示したもので、教授者はそれぞれ最も各自の学習者に適した方法を利用されたい。

この「指導参考資料」では、主として場面を中心とした指導法を述べてあるので、文法や発音については、各課の解説部分ではほとんど触れていない。それらについては、巻末の「文法事項解説」「発音指導上のポイント」を参照されたい。

4 学習者のレベル分けについて

中国帰国者の日本語指導の困難点の一つは、クラスの学習者の質を均一化することが難しく、どうしても能力の優れた者と劣る者と同じクラスで教えなければならないという点であろう。このような現実に対応するために、この「指導参考資料」では、学習者を学習適性によって三つのレベルに分け、レベルⅡの学習者に対しての指導法を中心にした。ただし、必要に応じてレベルⅠ、レベルⅢの学習者に対する指導法を*印を付し注記した。

レベルⅠ：日本語習得に限界がある者。

レベルⅡ：適性は低いが、学習を継続すれば一定の進歩は望める者。

レベルⅢ：適性の高い者。

このレベル分けはあくまでも学習適性の問題であって、それまでの学習によってどれだけ日本語を習得したかによって分けたものではない。一般に年齢が上がるにつれて、学習適性も低くなるのが普通であるが、年齢のほかにも、文盲の問題や一般的な抽象化能力など学習適性に関する要因は数多くある。とくに問題なのは心理的要因で、日本語は難しいと最初から心理的障壁を作ってしまう場合である。このような学習者には、まず3で述べた学習の動機付けを丁寧に行い、障壁を取り払ってやる必要がある。

レベルⅠの学習者に無理に長い複雑な文を覚えさせたり発話させたりすることは、かえって障壁を厚くしてしまう恐れがある。そのために、日本語が嫌いになり周りの日本人と付き合うことも恐れるようになっては取り返しがつかなくなってしまう。このような学習者には、心理的に負担にならないように配慮しながら、とにかく学習を継続させることが問題である。そのためには、発話はできなくとも聞き取りだけはできるようにするなどの指導上の工夫が必要である。また、レベルⅠの学習者には教室外の実地訓練を主体にして、学習動機を高めることも重要であろう。

5 本書で使用する用語について

主として【展開】の部分で次のような用語を代用している。

ア リピート練習

文や単語が滑らかに発話できるようにするための練習で、教授者の後について（リピートさせて）発話させる。最初は教授者もゆっくり言って学習者に後について言わせるが、だんだんスピードを上げて、日本人が普通に話すときのスピードにしてもついて来られるよう訓練する。クラスの学習者全員と一緒に発話させる「一斉リピート」と一人一人に発話させる「個別リピート」がある。

イ パターン練習

文の形（パターン）を習得させるための練習で、代入練習、交換練習などがある。代入練習は、文の形の一部を入れ替えて発話させる。例えば、「8時に起きます」の「起きる」を「寝る」に入れ替えて「8時に寝ます」と言わせる。

この場合、教授者は入れ替えさせる部分を言うと、学習者がそれを文の中に入れてすぐ答えるように訓練する。学習者がゆっくり考えてから答えが出てくるようではまだ練習が足りない。

（教授者）寝る → （学習者）8時に寝ます。
食べる → 8時に食べます。
帰る → 8時に帰ります。

変換練習は、文の形を変えさせる練習で、教授者が「8時に起きます」と言って、学習者に、「8時に起きました」と言わせる。

これは、現在形の文を過去形の文に変えさせる変換練習である。

代入練習や変換練習で教授者が言う語や文を「キュー」（手掛かり）と言う。パターン練習をさせるときには、教授者はキューをたくさん用意しておいて、矢継ぎ早にキューを出し、学習者にどんどん新しい文を言わせるようにしなければならない。

ウ 対話練習（質問応答練習）

教授者の質問に対して学習者がある文の形を使って答える練習。パターン練習で文の形をしっかり覚えさせた上で行う。

パターン練習で、
（ ）時に（ ）します。

の形がすらすら言えるようになったら、教授者は、
何時に寝ますか。

と質問してみる。学習者は自分が毎日何時に寝るかを考えて、例えば、
10時に寝ます。

と答えられればよい。

パターン練習が形を覚えるための機械的な練習であるのに対し、対話練習は学習者が自分の状況に合った答を出すので、コミュニケーションになっている点の特徴。一問一答でなく、教授者がいろいろな質問を出して長い対話にしてもよい。

A: 何時に寝ますか。

B: 10時に寝ます。

A: 朝は何時に起きますか。

B: 8時に起きます。

エ 場面練習

短いシナリオ（会話文）を学習者に覚えさせて、教授者と学習者あるいは学習者同士で芝居をさせる練習。

医者: どうしました。

患者: ここ、ピンで切っちゃったんです。

医者: どれどれ。（患部を見て処置する）はい、けっこうですよ。

患者: どうもありがとうございました。

医者のせりふを学習者A、患者のせりふを学習者Bに覚えさせて、ABで会話をさせる。このとき、その場の雰囲気を作るために、場面に合った小道具要素（医者と患者の椅子、できれば医者の白衣など）を用意してやらせると練習が楽しくできる。

場面練習のために用意するシナリオ又は、その芝居をスキットと言う。

オ ロールプレイ

場面練習を行う前の準備のための練習で、せりふを覚えるために、普通最初はシナリオを見ながら会話をさせる。芝居でいえば、舞台稽古に入る前の本読みの段階である。最終的にはシナリオを見なくても、せりふが言えるようになるまで練習する。

カ 実習

教室で覚えた日本語を教室外の実際の場面で使ってみる練習。教室で教授者とだけ日本語を話すのではなく、外部の人とも会話ができるようにすることが重要なので、外部の人を教室に招待してもよい。教室で料理を教える場면을勉強したら、近所の人を教室に招いて一緒にぎょうざを作る実習をするなど、教授者はそばで見ている、分からない言葉が出てきたりしたら助けてやるようにする。

キ 聞き取り練習

テープレコーダーを使ったり、教授者が文を言って聞かせたりして、学習者に意味を取らせる練習。意味が分かればよいので、必ずしも日本語で答えさせる必要はない。特にレベルⅠの学習者には、教授者が中国語が分かれば、中国語で答えさせてもよいが、分からなければ、教具や絵をかいたカードなどで答えさせて、聞き取れたかどうか確認する方法もある。たとえば、時間を聞き取らせる練習では、おもちゃの時計を使って、針を動かして答えさせたりするとよい。

教授者が、

今、8時半です。

と言って、学習者は時計の針を8時半に合わせるなど。

なお、本書では、昭和57年度作成の『中国からの帰国者のための生活日本語』を、便宜『生活日本語』と表示した。また「教科書」は、『生活日本語Ⅱ』を指す。